

仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第 15 地点現地説明会資料

平成 26 年 10 月 18 日 東北大学埋蔵文化財調査室

《調査要項》

遺跡名称：仙台城跡（二の丸北方武家屋敷地区第 15 地点）

調査原因：東北大学課外活動施設新営

調査主体：国立大学法人東北大学

調査担当：東北大学埋蔵文化財調査室

調査期間：平成 24 年 4 月～平成 26 年 11 月

（予定、途中で中断期間あり）

調査面積：1,480㎡

＝二の丸北方の武家屋敷について＝

仙台城は仙台藩初代藩主伊達政宗によって、慶長 5 年（1600）から築城が開始されます。これに合わせて、仙台城下の造営も開始されます。二の丸北方の武家屋敷も、この頃から造営されたと考えられます。寛永 15 年（1638）

には、二代藩主伊達忠宗によって二の丸が造営され、これ以降二の丸が仙台城の実質的な中枢となり、幕末まで維持されます。寛文 4 年（1664）以降の城下絵図には、屋敷地の区画と人名が記され、そこに住んでいた家臣を知ることができます。二の丸北方の武家屋敷は、二の丸の裏口である台所門に接する地域として、比較的上級の家臣の屋敷地として利用されました。

仙台城周辺の武家屋敷は、明治維新後にほとんど取り壊されます。取り壊し後、畑として使用された時期があったことが、これまでの調査で判っています。明治 21 年（1888）に陸軍第二師団が設置されると、旧二の丸には師団司令部、その周辺には第二師団関係の施設が設置されます。

＝検出遺構の概要＝

今回の調査地点には屋外プールがありましたが、プール建設による削平は少なく、江戸時代の遺構面がおおむね残っていました。

調査区の北東隅に近いところには、深い沢状の遺構があります（1号遺構）。北側へ向かって深くなっており、北東側の段丘崖の下へ流れていく沢と考えられます。

この沢に合流する形で、調査区を西から東へ横断する溝（10号溝）があります。18世紀から19世紀にかけての時期と思われる。この溝をはさんで地面の標高が北側が低くなることから、ここが南北の屋敷の境と考えられます。この溝には、北側・南側の両方から溝や暗渠が合流し、主要な排水路として利用されたと考えられます。

調査区の東端には溝状遺構（56号遺構）が南北に伸び

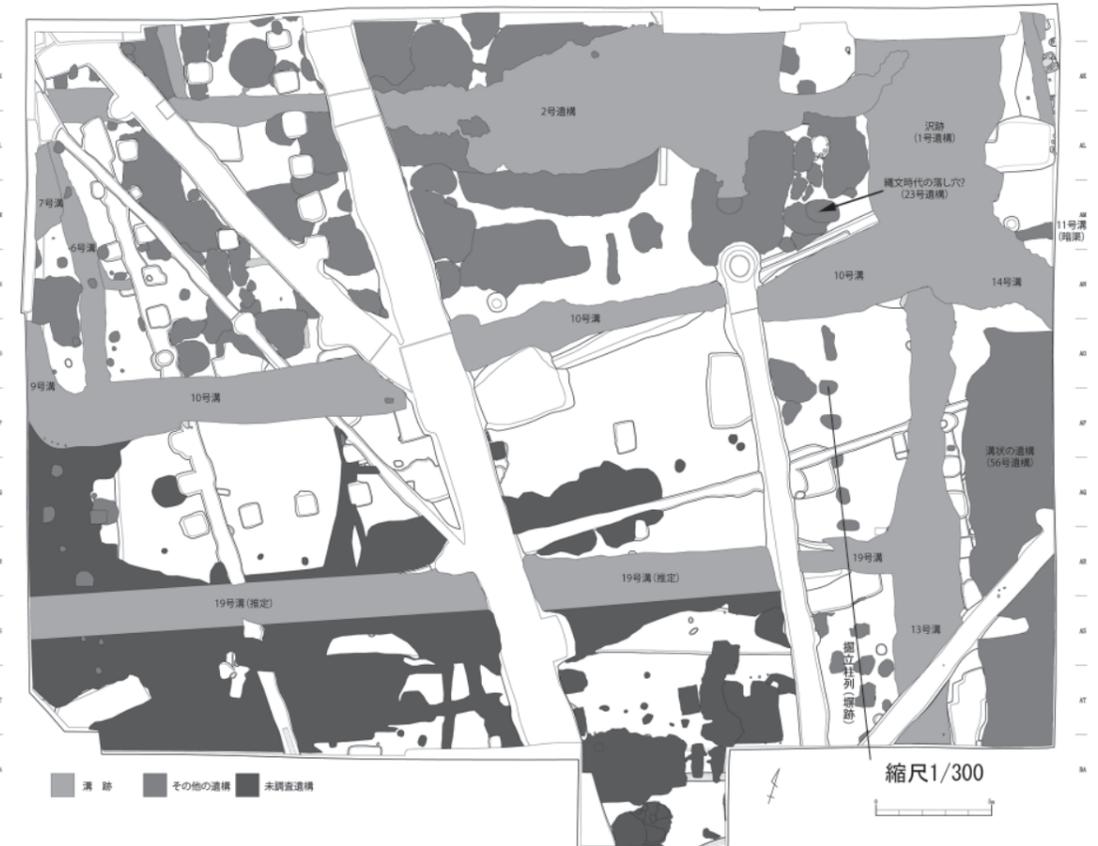


地山上面での遺構確認状況（2回の空撮写真を合成）

ており、溝状と方形などの掘り込みが連続します。この溝状遺構は、南東に隣接する第 4 地点の調査区で続きが発見されており、これをはさんで地面の標高が東側が低くなることから、ここが東西の屋敷の境と考えられます。時期は 18 世紀が中心で、19 世紀まで使われた可能性があります。

溝状遺構の西側には、南北に伸びる溝（13号溝）と掘立柱列が並びます。第 4 地点の調査区では、溝が埋まっから柱列が造られたことが判明しています。13号溝は、17世紀初頭に掘られた可能性があり、17世紀の内には埋没したと考えられ、古い時期の区画溝と思われる。掘立柱列は、屋敷を区画する塀と考えられます。13号溝には、東西方向に伸びる 19号溝が接続します。13号溝が一部埋まった段階で造られています。古い段階の、東西方向の区画溝と考えられます。

絵図の記載を参照すると、調査区の北東隅に近い部分が、4つの区画の屋敷地の境であったと考えられます。



主な遺構の配置模式図

仙台城下の武家屋敷では、道路に面した表側は塀をめぐるしますが、それ以外では生け垣で屋敷境を区画していたとされています。今回の調査でも、屋敷境と考えられる塀跡は、1列だけしか発見されていません。南北の屋敷境と考えられる 10号溝の周囲には、遺構がほとんどみられない区域が帯状に東西に伸びます。このような部分には、樹木が植えられ、生け垣とされていたと考えられます。

東西の区画溝である 10号溝から北側では、円形や不整形をした浅い掘り込みが連続しており、庭園の池であった可能性があります。何回か造り替えられ、最後には東西に溝が掘られています（2号遺構）。古い東西方向の区画溝である 19号溝より南側の区域は、調査が未了の部分がありますが、溝や大規模な掘り込みが見られ、柱穴はあまり見られません。

江戸時代以前の遺構としては、縄文時代の落とし穴の可能性のある遺構が 1基見つかっています。未調査です

仙台藩の家格			
家格	人数	備考	
一門	11	角田石川氏・亙理伊達氏・水沢伊達氏・涌谷伊達氏・登米伊達氏・岩谷堂伊達氏・岩出山伊達氏・宮床伊達氏・川崎伊達氏・白河氏・三沢氏	
一家	17	鮎貝・秋保・柴田・小梁川・塩森・大条・泉田・村田・黒木・石母田・瀬上・中村・石川・中目・亙理・梁川・猪苗代・天童・松前・葦名・本宮・高泉・葛西・上遠野・保土原・福原	
準一家	10		
一族	22	大立目・大町(胆沢郡)・大塚・大内・西大条・小原・西大立目・中島(江刺郡)・宮内・中島(伊具郡)・茂庭・遠藤・佐藤・畠中・片平・下郡山・沼辺・大町(宮城郡)・高城・大松沢・石母田・坂	
宿老	3	着座のうち一番座の三家(遠藤・但木・後藤)	
着座	28	正月等の儀式で登城し着座して藩主に挨拶する家臣	
太刀上	10	正月賀礼に太刀を献上し藩主から盃を頂戴する家柄	
召出一番座	38	正月宴會に召し出される家柄	
召出二番座	51	正月宴會に召し出される家柄	
平士(1000石以上)	6		
平士(500石以上)	68		
平士(100石以上)	994		
合計	1258		



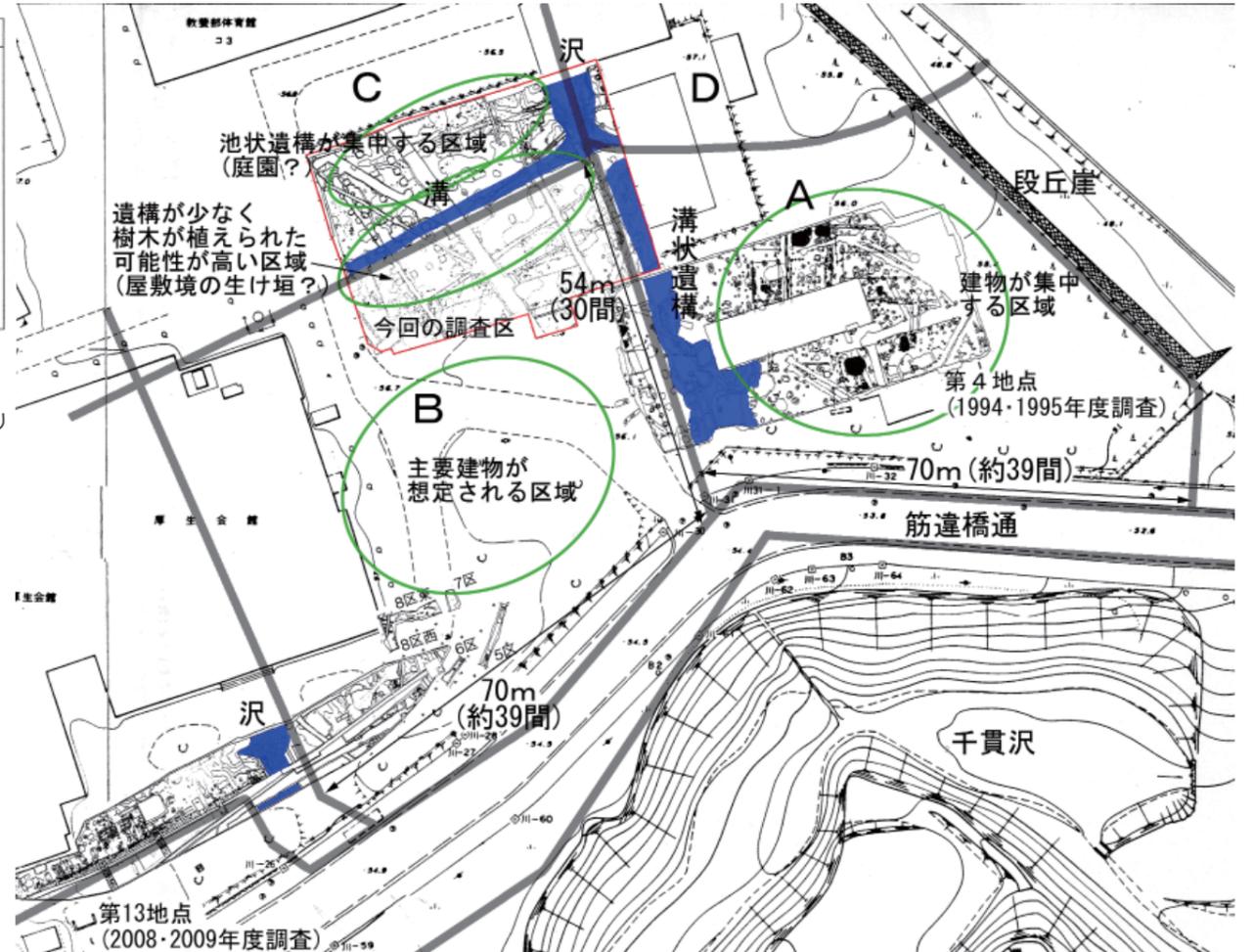
天明6～寛政元年(1786～89)

仙台北下絵図

知行高	間口	奥行
800石以上～1000石未満	40間	30間
500石以上～ 800石未満	30間	
300石以上～ 500石未満	25間	
150石以上～ 300石未満	17間	
100石以上～ 150石未満	14間	
100石以下	12間	25間
足輕組頭	10間	
足輕	7間	
諸職人棟梁	12間	
諸職人	6間	

※寛文5年(1665)『仙台惣屋敷定』による
63 仙台北城下における侍屋敷などの面積規定

『仙台市史通史編3近世I』より



調査区と屋敷区画の復元(縮尺1/1000)

の周辺で12点出土しました。当地区では、弾丸はほとんど出土しないのが通常です。D区画は、18世紀の絵図には「弓的場・鉄砲星場」と記されており、弓矢や鉄砲の射撃場として使用されたことがわかります。多数の弾丸の出土は、鉄砲の射撃場で使用されたものと見られます。

縄文土器、石器も発見されました。細かな時期が判明するものはわずかですが、縄文時代晩期の土器があります。

＝屋敷区画の復元＝

二の丸地区と武家屋敷地区との境の千貫沢は、江戸時代から大きく変わっていないと見られることから、沢の北側に沿って道路(筋違橋通)が伸びていたと推定されます。南西側の厚生会館増築に伴う第13地点の調査では、千貫沢から分岐して北側に入り込む沢が検出されました。城下絵図で、B区画の西端に描かれた沢に相当すると考えられます。東側のグランドとの境の段差は、段丘崖です。A区画の東側は、この段丘崖が屋敷境であったと考えられます。

これらに今回の調査成果を合わせて考えると、図示したように、A区画とB区画の、二つの屋敷地を復元することができました。道路に面した間口は、両方とも約70m、二つの区画の境の部分での奥行きは54mとなります。仙台北城下の屋敷の計測には、1間が6尺(約1.8m)の「仙台屋敷竿」が使用されました。今回復元できた屋敷の間口は、約39間、奥行き30間となります。南側の道路

の幅をどのように想定するかで数値は若干変動しますが、基準に照らし合わせると、緑高が800～1000石の家臣の屋敷地が、「間口40間、奥行30間」とされているのに相当します。これは、特別に身分の高い別格と言える家臣の屋敷地を除くと、最大規模のもので、面積の正確な算定は困難ですが、3,000平米を越え、1,000坪ほどの広さであったと考えられます。

＝屋敷地内での土地利用＝

今回の調査区では、建物跡はほとんど検出されませんでした。一方、南東側に隣接する第4地点の調査区では、多数の掘立柱の柱穴などが検出されています。

屋敷の区画の復元を踏まえて考えると、南側の道路に門があり、そこから若干の間を空けて、主要な建物が建てられていたと考えられます。裏手にあたる区域には、建物がほとんど建てられていなかったと考えられます。B区画とC区画の屋敷境の付近には、ほとんど遺構の見ら

れない区域があります。ここには樹木が植えられ「生け垣」とされていた可能性が考えられます。また、C区画の屋敷境に近い区域には、池と考えられる遺構が展開することから、庭園として利用されていたと思われます。このように、屋敷地の中での、土地利用のあり方を、おおむね復元することができるようになりました。

＝まとめ＝

今回の調査成果に、これまでの調査成果を合わせて検討することから、屋敷地の具体的な大きさが復元できました。また、屋敷内での土地利用の実態など、仙台北城周辺の武家屋敷の実態を明らかにする上で、重要なデータを得ることができました。

関連絵図人名

年代(西暦)	A区画(南東側)	B区画(南西側)	C区画(北西側)	D区画(北東側)
寛文4年 1664	大立目将監 虎間 45貫文	大河内善左衛門 不明 20貫文	伊藤道泉 内科医 14貫文	林八郎兵衛 虎間 1貫文
寛文8・9年 1668～69	大立目将監 虎間 45貫文	大河内善左衛門 不明 20貫文	伊藤道仙 内科医 14貫文	林八郎兵衛 虎間 1貫文
延宝6～8年 1678～80	大立目弥次 虎間 45貫文	大河内善左衛門 不明 20貫文	伊藤道仙 内科医 14貫文	林八郎兵衛 虎間 1貫文
延宝9年～天和3年 1681～83	記載無し	大河内善左衛門 不明 20貫文	長沢与兵衛 不明	林八郎兵衛 虎間 1貫文
元禄4・5年 1691～92	成田助之丞 虎間 50貫文	太田次郎兵衛 召出 130貫文	記載無し	林八郎右衛門 虎間 1貫文
享保9年以降 1724～	戸田喜大夫 着座 50貫文	岩山縫殿介 虎間 62貫文		佐伯太之助 不明
宝暦10年～明和3年 1760～66	記載無し	記載無し	記載無し	弓的場鉄砲星場
天明6年～寛政元年 1786～89	大町久馬 着座 63貫文	古内進 不明	高橋定五郎 次間 40貫文	弓的場鉄砲星場
安政3～6年 1856～59	大松沢越中 一族 61貫文	佐伯勇五郎 不明	石母田但馬 一族 100貫文	錦織即休 着座 30貫文

仙台藩では、1貫文＝10石。
C区画は、東西に分けられている時期があるが、その場合は東側の区画を記載。
平士(大番士)は、登城した際に控える部屋の名前をとって、上位から虎間番士・中間番士・次間番士・広間番士に分けられた。

が、これ以外にも縄文時代の遺構となる可能性あるものが見つかっています。

＝出土遺物＝

江戸時代の初頭から幕末までの時期の、陶磁器・土器類・土人形・土製品や瓦、金属製品など、多数の遺物が出土しています。古い段階の区画溝(13号溝)からは、17世紀初頭から前葉の中国産磁器や志野・織部などの陶器が、ややまとまって出土しています。

土人形や土製品も多数出土しています。土人形や土製品は、二の丸地区ではほとんど出土しませんが、屋敷地では多く出土します。

瓦は全体に少なく、屋敷地全体に共通する特徴です。門や塀、蔵など、一部の施設以外は、瓦は使用されていなかったと考えられます。

特記されることとして、鉛製の弾丸が、調査区北東隅